

第二章 姫様説得騒動

100 YEARS WAR OF THRONES

タイムーン世界に棲むあらゆる生物は、「靈力」という神秘の力を宿している。

魂を肉体につなぎとめているのも、意思によって肉体を動かすことができるのも、また心臓のような生命活動に必要な不随意の動きも、全てこの靈力の働きによるものだ。

ただ、普通の動植物や人間は、それこそ取るに足らないほどの、微弱な靈力量しか有していない。ために、その神秘的な力に対する自覚がそもそももない。靈力の存在自体を知ることもなく、それで何か困るでもなく、生涯を終えるのが一般的だ。

しかし、靈力には様々な扱い方があり、突き詰めればそれこそ、魔法のような超常現象も引き起こすことができる。

例えば、魔獣だとか幻獣だとか聖獣だとか瑞獣だとか呼ばれるそれらの種族は、ある程度の扱い方を生来的に体得している。

リクドールの騎士ギリオンが、いま駆っている天馬もそうだ。

背中から一對の翼を生やした馬で、これを羽ばたかせて大空を飛翔する。が、鳥たちのように物理的、空気力学的に飛行しているわけではなく、靈力で周囲の風を操って飛ぶ幻獣なのだ。

優雅に天空を翔けることにかけては、タイクーンでも特に秀でた種族で、神々やその眷属たちは好んで乗騎にする。

実際、ギリオンは相当のスピードで速駆けさせていたが、騎手にその負担がかかることはない。通常の物理現象下であれば、激しい向かい風を浴びて前髪が逆立ち、体が冷えて体力を奪われることだろう。しかし、ペガサスは靈力によって、周囲の大気を巧みに操って飛ぶために、鞍上の彼が浴びるのも、そよ風程度。むしろ、春の麗が心地よいくらいであった。

同様に、隣をペガサスで飛行する女騎士ネイトと、言葉を交わす余裕もあった。

ふたりは現在、王都エーンケスターへと向かって、空旅の途中なのだが――

「しかし、たかが隣町まで、ペガサスでとろとろ移動つてもかたまりいなあ」

「仕方ないでしょ。新しい巫女様をお迎えに上がるんだから。それもわからないバカ？」

「オレだってわかっちゃあ！ ただ、自分で飛ばば、すぐ着くのにって思うとなあ……」

「で、帰りは？ 巫女様にも一緒に飛んでくださいってお願いするの？ それもわからな――」

「バカじゃねえ！ この移動時間が手持ち無沙汰だなんて、愚痴ってんだけだろ！」

「愚痴りたいのは私の方よ。あんたみたいなバカとダべる以外、暇潰しが無いんだから」

「そもそも誰かさんが巫女様を抱えて飛ばば、ペガサスなんか要らないんじゃないスかねえ？」

「リクドー様がそうすべきってこと？ やっぱあんたバカ。デリカシー、ゼロ。もし巫女様が

シヤイな方だったら嫌がるでしょうに」

「テメエが抱えて飛べって話だよ、ネイ！」

「ハア？ 私がそんな真似まねできるわけないでしょ？」

「だよなー！ ネイは飛び方までぶつきらばうだもんなー！」

「万事、粗雑な女で悪かったわね」

ネイがペガサスを駆って、ギリオンの後頭部へ、蹄ひづめで蹴けりを入れてきた。

「てめーは『粗雑』通り越して『粗暴』だろうがッ。オレじゃなかったらアタマ割れてんぞ！」
「柘榴ざくろみたいになつたら面白おもしろいのに」

と、冷笑するネイに、ギリオンは大声で抗議をわめき返す。

ヴェステルの温泉街と王都エーンケスターは、約三十キロを隔てている。

馬車での移動なら一日がかり、ペガサスでも到着まで三十分前後の距離だ。

しかし、ギリオンやネイが自力で飛べば、ものの十分もかからない。

神々やその眷属ガイスたちは、膨大な霊力アウラを保有し、またその扱い方にも精通している。それはもうペガサスや他の幻獣魔獣ほかなんぞとは、比にもならないレベルである。

霊力アウラを用いて多種多様の超常現象を起こすことくらい、まるで朝飯前。

呼吸をするように簡単なものから、儀式が必要なほど難解で面倒なものまで含め、神々が「秘法アルカナ」と総称する技術だった。

ギリオンやネイは、そのうちの「風の秘法」^{アルカナ}を用いることで、ペガサスに頼らずとも天翔けることができる。暴風を操って周囲に集め、己^{おのれ}が体を浮かせ、轟音^{ごうおん}とともに飛ばすのだ。

特にふたりが持つ霊力量^{アウラ}は、他の眷属^{ガイズ}たちと比べても、相当のものだった。

ゆえに同じ風の秘法^{アルカナ}を使わせても、ズバ抜けた飛翔速度を出すことができた。

一方で、ふたりとも根が大ざっぱというか、秘法^{アルカナ}を扱う巧みさは褒められたものではない。

誰かを抱いて飛ばうものなら、周囲を荒れ猛^{たげ}る暴風のせい、腕の中の彼・彼女は髪やらなんやらを揉^もみくちやにされて、ひどい目に遭うだろう。

これが仮にリクドーなら、周囲に風を集めても、そよ風ほどにも暴れさせない。音も立てさせず、誰にも気づかせず、するすると体を浮かせて、飛んでいく。

ギリオンたちは一直線に飛ぶか、急角度で曲がる以外、ほとんど微調整^{きせう}が利^きかない。が、リクドーはまるで散歩でもするかのように、自由自在に大空を遊んでみせるのだ。

神々でも五百歳くらいの若い連中は、ギリオンたちと五十歩百歩の稚拙な飛び方しかできないから、リクドーの技倆^{ぎりょう}はそれだけ玄妙も玄妙ということだった。

と――

リクドーなら生身の常人である巫女を抱えて飛ぶことができる、しかしネイにはできない理由^{りゆう}というものが、それなのだが、

「ギルの秘法アルカナだつて粗野極まりなくせに、よくも私だけ批判できるわね？」

「オレは男だから、多少ワイルドな方がカッコいいだろ？」

「ガキ臭さ。あと女ならお淑しとやかであるべきとか、大きなお世話」

「嫁のもらい手がなくて、いつか後悔すんのはダメエだぜ？」

「じゃあギルがもらつてくれればいいじゃない？」

「エエエツツ????」

「あ、真に受けた。やつぱバカ」

「男のジウンジョーもてあそ弄びやがつてダメエなんざこつちから願ひ下げなんだよヴォケがツツツ！」

互いにペガサスの鞍くらから半ば身を乗り出して、ギアギアと口ゲンカを続けるふたり。

そうこうしているうちに、なんだかんだ時間は潰れ、王都に到着した。

城の前庭が閱兵広場を兼ねていて、ちょうどいい具合に開けていたので、ペガサスを馭ぎよして

ソフトランディングさせる。

「一旦いったん、休戦だ。ネイ」

「巫女様に見苦しいところはお見せできないものね。ギル」

うなずき合つて鞍かから降り、ギリオンたちはまずリクドローを捜した。

白羽の矢が放つ地素ガイアも、リクドローがわざと放出させている靈力アウラも、この城内から感じられる。

つまりは主神も巫女もそこにいる。

リクドローのことだ。きつと今ごろ初対面の巫女とも打ち解け、談笑に花を咲かせ、彼女の緊張をほぐすのに成功していることだろう。

ギリオンは信じてそう疑わず、正面から城内へ足を踏み入れた。するとそこに——玄関ホールに、なぜかリクドローがひとりでした。

「おい、ギルー。ネイー。俺はここだー」
こっちの姿を見るなり、手を振ってきた。

冷たい床に正座をしたまま。

拷問用の大きな石を膝の上に載せて。

首から「私は疫病神です」と書かれた木板を提げて。

「なんで石抱いてんの神サン!?!」

「そういうプレイ? 実は被虐趣味だったの?」

ギリオンはネイと左右から詰め寄り、ツッコんだ。

「いや……ははは。それがな、新しい巫女が言ったんだよ。俺がこの格好で二時間ガマンしたら、三分だけ話を聞いてやるって……」

「どういう理屈だよ神サン!?!」

「今度の巫女様、城勤めの拷問吏だったの？」

またネイと左右からツッコむギリオン。

するとリクドローがさめざめと、ここに至るまでの経緯や、自分で女官たちから聞いて調べたお姫様の事情を、説明してくれる。

「——てなわけで、俺はあとまだ二十三分、この格好でいなきやいけねえんだ」

「情けない。それでも神？」

「トホホ……」

ネイにズケツと言われて、リクドローはますます肩を落としました。

しかし、こればかりはギリオンもネイに同感である。

「リクドロー様よお、男ならもつと強引ごういんに、正面からかき口説くしかねくしかねえって！ 『姫サン、俺の巫女オンナになれよ』 ってさあ！」

「よせやい、ギル。俺ももう、いい歳ととしたオッサンなんだ。そんな元気はねえよ」

「そうよ、ギルはリクドロー様のことが何もわかってない」

ネイが急に理解者面ぶらになって言った。

「口説くしかねくなんてまどろっこしい。さっさと押し倒すだけ」

「おまえ、俺のこととんだけ鬼畜だと思ってるの!？」

そんなん若い時分でもやったことないわと、猛抗議するリクドロー。

「じゃあ、どうするの？」

「とにかく俺、あと二十二分、こうして耐えてるから……」

と、しおらしげに言う主神を見て、ギリオンはウウムと腕組みする。

もっと毅然^{きぜん}として欲しいところではある。だが、ヴェステルの巫女が相手ならば、ある程度はこっちも下手に出て、そのミリアルージュ姫の意に沿う必要がある。

そして一刻も早く、巫女の役目を引き受けてもらわねばならない。

「よりにもよって、ヴェステル火山は十大《龍脈》の一つだからなあ。巫女が不在で、火山の力も使えねえってことになったら、オードランの野郎もブチギレだよなあ」

「従属神の辛いところね」

「ただでさえリクドー様は、ろくに働かねえって白い目で見られてんのに。これ以上、立場が悪くなったら、首切りもあるんじゃないの……？」

ギリオンがネイと交互になって言うのと、

「あるかもなあ……」

リクドーは天を仰いで慨嘆した。

ギリオンも一緒になって額に手を当てる。

この場合の首切りとは、文字通りの意味だ。

首と胴を切り離して、天へ還れということだ。

神の魂は不滅だが、肉体は有限。喪えばもう二度と、地上には干渉できない。

それを望まず、大戦に敗れた神々が、従属神としてでも生き永らえることを選んだ時、勝者を主神と仰ぎ、服従の契約をするのが普通だ。

これは口約束などではない。

《神威》を用いた、絶対的強制力を持つ盟約だ。

「今すぐ自分の心臓を抉り出してみせろ」

と、主神に命じられれば、従属神は本当にそうするのだ。

何の抵抗もできず。躊躇ささえず。

「わかった、神サン！ オレが一肌脱いでやらあつ」

ギリオンは一念発起し、自分の胸を叩いた。

本質的に世話焼き体質なのだ。

「ここであと二十分も燻ってもしかあねえだろ？ オレが謁見を申し込んで、説得してくる」

「おお……っ。ギル……おまえは頼りになる奴だと思ってたぜ……っ」

「神サンはここで、大船に乗ったつもりで待っててくれ！」

「泥船で沈まなきやいいけど。ちょうど石抱いてるし」

「ネイは黙ってるっ」

感激頻りの様子のリクドールと、毒舌家のネイを置いて、ギリオンは城中へと進んだ。適当に女官を捕まえて、謁見の手続きの仕方を聞く。

「順番さえお待ちいただければ、姫様はどなたでもお会いになつてくださいますよ」

「なんだよ、いい姫サンじゃねえか！」

かかたいしよろ
呵々大笑しながら、その女官に案内してもらおう。

今日の陳情は全て終わっていて、すぐお目通り叶うかなという話だった。

ギリオンは喜び勇んで、謁見の間へと入室した。

五分後。

「——てなわけで、姫サンにヴェステルの巫女になつてもらわにゃ、困るんだよ！」

ギリオンは身振り手振りを交えて、熱弁を振るっていた。

城の兵士が二人がかりで謁見の間から追い出そうと、しがみついたまま押したり引いたりしてくるが、超人的な臂力りよりよくを持つ彼の体幹は、ピクリとも揺るがない。

姫の命令を守るため、汗だくになつている兵士たちには申し訳なかった。

しかし、リクドールもこれくらい強引に話をするべきだったのだと、ギリオンは思っている。

「なあ、頼むよ。姫サン！」

「お断りだわ。他を当たって頂戴」

ところがミリアは、玉座でつーんとそっぽを向いた。

最初はにこやかな感じで会ってくれたのだが、こっちがリクドー関係者だとわかった途端、やさぐれた態度になったのだ。

「オレや神サンだつて無理強いはしたくないし、可能なら他を当たるぜ？　でも、ヴェステル火山が選んだのは——白羽の矢が立ったのはあんたなんだよ」

「じゃあ、選び直せばいいんじゃないの？」

「簡単に言ってくれんなあ！」

「なによ？　私が断つたら、もう二度と巫女は見つからないってわけじゃないんでしょ？」

「そりゃそうなんだけどよ……」

もし仮に、そこまで巫女の適格者が少なかったら、^ラ大戦はとつくに終わっている理屈。

巫女になれるほどの、高い^{アラ}霊力を持って生まれた逸材は確かに稀少だが、なにしろ「巫人を含む全人類の数」という分母が^{ばくだい}莫大なのだ。

そう、百年前に神々が降臨し、人々に聖なる指輪という恩恵を与えて以来、人口は増大する一方だった。指輪を通して分け与えた^{ガイア}地素が、^{ききん}飢饉や疫病を克服させた。

「ただ、姫サンの次の巫女を選ぶためには、一年待たないといけねんだよ」

「どうして？」

「新しい白羽の矢に、ヴェステル火山の地素ガイアを馴染なじませるまで、そんだけかかんだ」

「ハア？ 予備くらい用意してなかったわけ？」

「オレらだつて可能なら、何百本でも用意しときたいんだけどな」

白羽の矢を神殿奥にある祭壇ガイアに奉納することで、地素ガイアを馴染なじませることができると。

祭壇から持つて出ると、三日で地素ガイアは矢から抜け落ちる。

そして、祭壇に複数の矢を奉納しても、地素ガイアが馴染なじむのは必ずその中の一本だけなのだ。

まるで《龍脈》自身に意思があるかのよう。「巫女は貴重な存在ゆえ、あたら粗雑そざつに扱あつかうなかれ」と神々へ戒めるように。

《龍脈》が誰を巫女に選ぶかをコントロールできないのと同じで、この現象も神々の力を以もつてすらどうにもならないことだった。

「フン、神サマっていつても大したことないのね。《龍脈》サマのが偉いんじゃない？」

「オレも同感！」

言い得て妙に、ギリオンは思わず相槌あいづちを打った。

「皮肉くじなったんだから、ちよつとは堪こたえなさいよ！」

「いや……ははは……」別に自分のことじゃないし、というのは誤魔化ごまかし、「とにかく、真剣まけんに考えてみてくれよ。一年だけでも巫女をやってくれねえか？」

「私は神を、自称する生き物の顔なんか、一秒たりと見たくないのよ！」

「ズケズケ言う姫サンだぜ」

でもギリオンは内心、これまた言い得て妙だと思った。

傍そばにいる大臣の方がむしろ顔面蒼白そうはくで、畏れ多いと震え上がっている。

「しかし、リクドール様もきらわれたもんだな……」

「あいつがアーダヴァイレルト家に何をしたか、胸に手を当てて聞いてみなさいよ！」

「え？ リクドール様は別に、何もしてねえんじゃないかね？」

「何もできなかつたの間違いでしょ!!」

ミリアは目を尖とがらせて非難してきた。

これは歴史の話だ。

百年前、天から降臨したリクドールは早速、エーンケスター王国に存在する、三つの《龍脈》を支配下に収めた。

それで、時のエーンケスター王（ミリアの曾祖父）に面会を求めた。

他には何も要求しなかったのだが、王の方から先に、城を挙げてリクドールに叩頭こうとう跪拜きはいし、服従を申し出た。

賢明な王は、ウエスパールアントやホランドのような大国強国ですら、一瞬にして滅ぼされた

ことを聞き及び、神々に逆らう愚を悟っていたのだ。

「リクドー様の思し召しに適うため、我らは何を差し出せばよろしいでしょうか？」
時の王は遜へりくだつてお伺いを立ててきた。

リクドーはこめかみをかきながら答えた。

「いや、そんなに畏かしこまらなくていいよ。悪いけど、こつちが選ぶ巫女を三人だけ、身請けさせて欲しいんだ。絶対に大切にすることって約束するからさ。他には何も要らないし、お互い不干渉へりくだって感じで」

「おお……っ。誠にございますか？ 他国では皆、泣く泣く徴税権を差し出したと、聞き及んでおりましたが……」

「要らない、要らない。その代わり、素敵な指輪を売るからさ。効果を確かめて気に入ったら、無理のない価格で買ってくれよ」

リクドーはそう言って、時の王を立ち上がらせ、対等の握手をした。

エーンケスターでは、人と神が調和の道を歩み始めた。
が、

リクドーは最初の 大戦ダイセンであつさりと雨の神オードランに敗れ、その従属神となった。

エーンケスター一帯は、変わらずリクドーの聖域サンクチュアリのままであつたし、オードランに取り上げられはしなかつた。

しかしその形態は、あたかも国王が諸侯を封じ、あるいは貴族が代官を立てるようなものだ。管理はリクドローが行うが、本質的にはオードランのものだ。

ゆえにオードランは、アーダヴァイレルト王家からも例外なく、徴税権を取り上げた。従属神たるリクドローは、それに否やを唱えられる立場ではなかった。

——というわけだ。

確かにリクドローは、アーダヴァイレルト王家に対して「何もしなかった」のではなく、「何もできなかった」という歴史だ。

「あいつが口だけ立派なクソザコ神じゃなくて、オードランにそこで勝ってたら、うちの王家も今ごろ落ちぶれてなかったでしょうね！ そしたら私もあんたらのこと、ちよつとは認めてやってたでしょうね！」

亡き祖父から散々その時の悲劇を、愚痴で聞かされたのだと、ミリアは言った。

「……………」

ギリオンは何一つ言い返すことができず、視線を逸らして口笛を吹いていた。

「こっちの目を見なさいよ。陳情に来たんでしょ、ギリオンさん？」

ミリアが玉座から凄んできた。

「建設的な話をしねえかっ」

「ほーん。何よ？」

ミリアは皮肉っぽく鼻を鳴らすと、「どうせくだらない話なんでしょ？」とばかりに、たかを括くくって訊きいてきた。

「落ちぶれたもんは、もうしょうがねえ！ 王家の権威を復活させようじゃねえか！」

生来ポジティブシンキングなギリオンは、本心からそう訴えた。

「ほーん。どうやって？」

「だから姫サンが巫女になるんだよ」

「ハア？」

ミリアの眼差まなざしが冷え冷えとしたものになる。

ギリオンは構わず続け、

「姫サンも知ってるか？ 巫女ってのは今や大勢の娘たちにとつての憧あこがれで、だけど簡単になれるもんじゃあねえんだよ。だからかよけいに、神聖で高貴はくってイメージがついてる。その巫女を王家から出したってなったら、アーダヴァイレルトも箔はくが付くだろ？ リクドー様になんかエラソーな神様ヅラさせて、それっぽい演出してもらってもいいし」

「却下」

ミリアは即答だった。ギリオンがこんなに言葉を尽くしているのに。

「なんでだよ！」

「だってあいつ、神様って言ってもただのグータラじゃん」

「うっ……」

「ちっとも神様らしくないって、王都にも聞こえてくるんだからね」

「……有名ツスか？」

「有名！ そんなあいつが後ろ盾になってくなくても、逆に王家が笑いや者になりそうっていうか」

「そこまで言うかよ!？」

「あいつがこの百年間、何をしてきたか、胸に手を当てて聞いてみたら？」

「……ずっと食って寝ては遊んでたツス……」

「ハイこの話、終わりー」

「ミアアがびしゃりと言った。

ギリオンは二の句が継げない。立ち尽くすしかない。

元々、頭が回る方じゃなし、これ以上の説得材料は逆さに振っても出てこなかった。

十

「ギルが帰ってきたわよ」

「ネイは顎あごをしゃくって示した。

肩を怒らせ、大股になって、こちらへ戻ってくるギリオンを。

リクドローは未だ石を抱いた格好のまま、

「お疲れ、ギル！ 首尾は——」

「うるせえ、このグータラ神！ 昼行燈！ ちゃらんぼらん！」

ギリオンにいきなり罵倒されて、閉口する。

かと思えば、

「おい、ギル！ 仮にもテメエの主に向かつて、その言いザマはなんだよ」

「全部ホントのことだろうが。胸に手を当てて聞いてみやがれっつ」

「本当のことだから傷つくんだろが！ もっとオブラートに包めつてんだよっつ」

「神サンの日頃の行いのせいで、説得失敗するわオレまで恥かくわで、散々だったぜっつ」

何があったのかギリオンは詳しく説明しつつも、乱暴につかみかかる。

それにリクドローも——正座したまま器用に——応戦する。

男ふたりの見苦しい、いがみ合いを横目に、ネイは「ハア、情けな」と嘆息。

形のよい尻をふたりに向けると、さっさと城の奥へと向かった。

「どこ行くんだ、ネイ!?!」

リクドローとギリオンが取っ組み合いを続けながらも、声をハモらせた。

「役に立たない野郎どもの代わりに、私が説得に行つてあげるわ。そのお姫様も、女同士なら

話が早いかもしれないでしょ？」

「おお……っ。ネイ……おまえは頼りになる奴だと思つてたぜ……っ」

「はいはい。ま、大船とは言わないけど、その泥船よりは気が利きいてるつもりよ」

「フイタなテメエ!? おう、お手並み拝見したろうじゃねえか！」

「ハイハイ」

ネイは振り返りもせず、手だけをひらひらと振つて、ふたりの見送りにこたへた。

五分後。

「——というわけで、フランクさとデリカシーのなさを履き違えた、バカでガサツな男どもの非礼はわびるわ。女同士の話し合いに来たの」

その間ずっと絶えることなく、主神や同僚に向けるものとは思えぬ、悪口雑言をまくし立てたネイに、玉座のミリアや隣の大臣、入口を警護する兵士たちの方がドン引きしていた。

「いいかしら？」

「え、ええ……。いいわよ……っ」

ミリアはまだ顔を引きつらせながらも、了承してくれた。

ネイが女だからか、単に圧倒されただけか、兵を使って追い出そうともしなかった。

「ただ、なんて言われても、私は引き受けませんけどねっ」

「あなたのその負けん気の強さ、きらいじゃないわ」

ネイはいつもの冷笑ではなくて、ちゃんと温かみのある苦笑を浮かべる。

こちらミリアが女だから、手加減している——わけではもちろんない。

このお姫様と会うのは初めてだが、実はすっかり感心していたのだ。

まだ十六の身空で、病弱な父王に代わって国政に携わり、しかも立派に振る舞っている。健気で、それでいて芯しんの強い少女ではないか。神様相手に遜るところか一步も引かず、啖呵たんかを切ってみせる氣つ風かぜのよさも氣に入った。

だから、いつもの毒舌も引つ込めて、親身になって説明する。

「今や世の娘たちにとって、巫女になるのは憧れの的よね？」

「それは知ってるし、さっきギリオンさんも言ってたっ」

そう、神々にとって、《龍脈》はその力の源。

ゆえに彼らと、《龍脈》の間を靈的に繋つなげる巫女は、とてとても貴重な存在。

神殿を上げて大切にし、上げ膳据え膳するのが通例だ。

それこそこんな、貧乏王家で姫様やつてるよりよほどに、贅ぜいたく沢な暮らしができるのだろう。

「あなたが今、着ているドレス——それ一張羅でしょ？ なかなかの仕立てだけど、少しくたびれてきてるわ」

「うっ……」

「王家の威厳を取り戻したいんでしょう？ だったら、まず相応の格好から始めないとね」

「ううっ……」

「例えば、私を見てくれる？」

そう言いつつネイは、左手を腰に当て、右手と右爪先を少し広げる優美なポーズをとった。

ミアも素直に従って、こちらの全身をしげしげと観察する。

そして、気づいたようだ。

ネイの全身に、下品にならない程度にあしらった、宝飾品の数々を。

しかも、どれもかなりの高級品。

ネイは昔から寶石に目がなく、金に飽かせて気に入ったものを買ひ漁り、毎日とつかえひつかえして着飾っている。

「あなたも巫女になったら、これくらいいくらでも買えるわ。ううん、リクドー様を買わせるのよ。女にとって、男に貢がせる以上の満足感ってないでしょう？」

「……ゴクリ」

ミアはネイのことを「こ、これがオトナの女……！」「なんて恐ろしい女性……！」という眼差しで見ながらも、生唾を飲み下していた。

「どう？ 悪くない話だと思わない？」

「うううう〜っ」

ミリアは唸うなった。弱り顔になった。

逆にネイは艶然えんぜんとほくそ笑む。

リクドーやギリオンでは叶わなかった、初めてミリアの心を揺り動かすことに成功した。蛇じやの道は蛇へび。女心がわかるのは、やはり女というわけだ。

しかし――

「……………やっぱダメ。…………無理」

ミリアは後ろ髪を引かれた様子を見せつつ、首を左右に振った。

「理由を訊いてもいい？」

まさかこれで落ちないとは。ネイは怪訝けげんに思いつつ食い下がる。

「理由って…………そりや…………」

ミリアは口ごもっていた。

かと思えば、じんわりと頬ほおを赤く染める。

その頬を恥じらい、隠すように、長い髪をまるでほっかむりのように深く引き寄せる。

「そりや、何？」

「……………だって」

「だって、何？」

「み、巫女になったら神様と、えっちしなきゃいけないでしょ？」

「あーそこね」

これはミリアの言う通りである。神々は巫女と契る（性的な意味で）ことで初めて、《龍脈》とライン霊路をつなげることができたのだ。

「乙女おとめにとっては一大事なんだからね!!」

「まーわかるわ」

「ホントにわかかってるわけ？ 例えばネイさんに、リクドローの奴が『ゲへへおっぱい揉ませろやー』ご主神サマに逆らうなやー』って言ってきたらどうすんの？」

「泣いて謝るまで無言で殴り続けるわ」

「でしょ？ まして巫女はそれ以上のことを要求されるのよ？ ムリムリ！」

ミリアは両手を使って、大きなバツテンを作った。

「そもそも、いくら今や巫女が憧れの職業だからって、ホイホイと貞操を売り渡すのが、私には信じられない！ 世の娘たちの方が間違ってるわよ！ 性の乱れよ！」

「若いのにすごいこと言うわね」

「それに私は、神を自称する生き物どもが、それを当然のことのように思ってるのもムカツ

ク！ ○ん○んモゲればいいのにつ

「若いのにすごいこと口走るわね」

「でも、ネイさんだつてそうは思わない!?」

「……私も感覚が麻痺まひしていたクチだけど、よくよく考えてみれば……思う」
「でしょー?」

「○ん○んモゲるべし」

ネイは大いにうなずいた。

ミリアとすつかり意気投合し、得意の毒舌で世の男神おがみどもを罵倒しまくる。
蛇の道は蛇。女心がわかるのは、やはり女というわけだ。

十

「ネイの奴、遅いな……」

リクドーは石を抱いて正座したまま、眩つふやいた。

如何いかに神として頑丈な肉体を持つ彼といえど、この格好で二時間は堪える。
痛みと痺しびれでそろそろ足の感覚がなくなってくる。

「噂うわさしてれば影つてやつたぜ、神サン」

ギリオンが顎をしゃくり、いつもの無愛想な顔で戻ってくるネイを示した。

「お疲れ、ネイ！ 首尾は——」

「黙れ、女の敵」

ネイがいきなり唾を吐いてきた。

あまりの態度にギリオンは啞然あぜんとなり、リクドローは「ミイラ取りがミイラかよ」と天を仰ぐ。

「……一応、いきさつを聞こうか？」

「ええ。よくよく肝に銘じるといいわ」

ネイの説明だか説教だか罵倒だかよくわからないものを、延々と聞かされるリクドロー。

「おまえだってさつき、強引に押し倒せとか言ってただろ!？」

と抗議しても、

「は？ なんの話？」

と真顔でスルーされる始末。

でも、その間に約束の二時間が経たった。

「よっし、行ってくるわ！」

「待ちなさい。まだ私の話が終わってないわ」

「拷問はもうこの石だけで充分だから！」

リクドローは抱いていた大石を軽々と投げ捨てると、スタコラと謁見の間へ逃げ去った。

両足に靈力アウラを循環させて、痺れと痛みを取り払った。

そして、謁見の間の大扉を叩く。

「二時間経ったぜ、ミリア！ 約束は守ってくれるんだらうな？」

彼女は玉座で待っていた。

律義に。だが、ふてぶてしく。

肘掛けに頬杖ほおづえをつき、まるで魔王の如くリクドーと相對する。

互いに不敵な笑みを浮かべ合い、視線で火花を散らすよう。

「当たり前じゃない。私はアーダヴァイレルト王家の姫よ？ その誇りにかけて、一度した約

束は軽々しく破らないの」

ミリアはそう言いながら、空いた左手の方で砂時計を弄ぶ。

「あなたの顔なんて一秒たりと見てたくないけど、三分だけ時間をあげる」

頬杖をついたのとは反対の肘掛けに、その砂時計をセットする。

（たった三分だ。畳み掛けるぜ）

リクドーはよく徹る声で主張を開始した。

「白羽の矢を用意できるまでの、一年だけでいい。巫女をやってくれないか？」

「ハア？ それすらイヤって、ギリオンさんに伝えたんですけどお？」

情報伝達はできてないのか？ 蒸し返すのか？ そんなんで三分勝負ができるのか？

ミリアのその小馬鹿にした態度が、雄弁にそう語っていた。

無論、ギリオンとネイから詳細な経緯は聞いている。

「ネイには俺と契るのがイヤだつたらしいな？ だったら契らなくてもいい」

「は？ どういうこと？ それじゃ巫女は務まらないんでしょ？」

「知ってるかもしれないが、俺は別に『大戦』にや興味ないんだ。だから差し当たって今すぐ、ヴェステル火山と霊路ラインを結んでおく必要はない」

聖なる指輪を通して、人々に分け与える地素ガイアが供給できなくなってしまうが、これも当面は問題がない。聖域サンクチュアリ内には既に膨大な量の地素ガイアが漂っており、この蓄えだけで一年くらいは保つだろう。十大《龍脈》の一つであるヴェステル火山は、それほどの地素供給源なわけだ。

「ただな、巫女不在となると、俺が主神オトリカンに怒られるんだ。場合によっちゃ、マジでぶっ殺されかねない。だから一年間、ミリアには巫女のふりをして欲しいんだよ」

「つまり、あなたの主神を謀たばかるってこと？ キタナツ」

「ククク……オトナはみんな汚いんだよ」

リクドールは罵倒が堪えるどころか逆に、悦に入ってほくそ笑んだ。

「そういうわけで、年に何回かある祭事とか、年始の集会とか、オードランの使者が来た時には同席とか、契る以外の仕事をして欲しいんだよ。それ以外の時は王宮ココにいてくれていいし、礼代わりに俺もおまえの公務を手伝う」

「それもう私じゃなくてよくない？ 誰か適当に身代わり立てればいいんじゃない？」

「ヴェステル火山のお眼鏡めがねに適うくらい霊力アウラが高い娘なんて、そうは見つからないんだよ。そんでオードランの眷属ガイズに、潜在的霊力量アウラを一目で見抜く奴がいる。もし万が一、偽者がそいつの目に触れることになったら、バレて俺の首が飛ぶ！」

「八方塞りふさがじゃないのよ！」

「だからこうして、おまえに頭下げてんだろ！」

リクドローは実際に、深々と腰を折ってみせた。

「ふーむ……」

「考え直してくれたか!？」

「ううん。ただ、憎つくき神に頭を下げさせるのって、けっこう快感ねって」

「おまえいい性格してんなロクな死に方しねえからなっ」

「冗談よ。考えたけど——やっぱナシで！」

「……理由は？」

「生理的に受けつけない」

「ンンンンンンンンンンンンな理由があるかよ!？ あんまりすぎるわ！」

「だって本音なんだし、しょうがないでしょ？」

「巫女のふりしてくれたら上げ膳据え膳、大切にするから！」



鼻歌交じりに一張羅のドレスへ着替え、謁見の間へ向かう。

昨日はリクドールの話をも三分間も聞いてやったが、もう金輪際、取り合うつもりはなかった。次またノコノコと顔を見せても、速攻で追い返すつもりだった。

「私が耳を貸すべきは、私の可愛い民たちだけよ！ さあ、今日もじゃんじゃん、陳情してきなさい！」

ミリアは玉座にふんぞり返る。

すぐ左に立つのは、この国唯一の大臣。

正面には、両開きの大扉。

そして、扉の左右には二人の儀仗兵が——ん？

「まちで……？」

ミリアは玉座から身を乗り出し、儀仗兵のうちの片方を矯めつ眇めつした。

「よっ。昨日はどうもな」

そこで槍を持って立っていたのは、どこからどう見てもリクドールだったのだ。

「なんであんたがそこにいるわけ!？」

「今日から俺、この城の兵士になったんで。よろしくう」

槍を構えて素振り始めるリクドール。

その絶妙なウザったさに、ミリアはワナワナと肩を震わせ、

「出ていって！」

「え〜。もう兵士なんだから行かないよ。ずっと姫様のお傍で警護するよ〜」

「こいつウゼエエエエエエエエエエツ」

ミリアはもう絶叫して、その場で地団駄を踏んだ。

どうしてこうなったのか？

「誰よ、私に無断でこんな奴を雇ったの!？」

「城の兵士の人事権は、大臣サンのもんだろー?」

「大臣! いくら袖の下をもらったのよ!？」

ミリアは隣に立つ中年を、左目だけをひん剥いて睨めつけた。

父国王の親友だと思っていたのに。

薄給でも働いてくれる、清廉潔白の士だと思っていたのに。

いつから賄賂で転ぶ男になってしまったのか。

ミリアは裏切られた気持ちだった。

果たして、大臣は答えた。

ミリアのプレッシャーにじりじりと炙られてか、噴き出る汗を拭いながら、

「実は……ヴェステル山脈に、万病に効くという伝説の秘湯があるそうにして……。人の足ではまず辿り着けない深山だそうです、リクドー様が国王陛下ご夫妻を、眷属の方々のご案内

付きでご招待してくださると、そう仰おつしやられては致し方なく……」

「ぐっ……」

ミリアは憤怒ふんぬの形相のまま、息を詰しませた。

大臣は裏切つてなどいなかった。

忠臣だからこそむしろ、この袖の下を受けとらざるを得なかつたのだ。

「ぐっ……ぎっ……ぎっ……」

ミリアは齒軋きしりしながら、リクドーに向き直り、にらみつける。

にわか言葉が出てこない。

ミリアだって、病弱な父には元氣になつて欲しい。

長生きして欲しい。

ならばもう、リクドーに出ていけなどとは、口が裂けても言えない。

「あんた、ホントにキタナイわね！」

負け惜しみを叫ぶのが限界だつた。

リクドーはニヤッツと頬ゆがを歪ゆがめて言つた。

「言つただろ？ オトナはみーんな汚よごいんだ。王女様もいい社会勉強しやけんになつたな！」

そのころ、ヴェステル神殿では——

老騎士パラディンカロロンが裏庭で、三頭のペガサスに鞍くらを着ける作業をしていた。

これでエーンケスターの国王夫妻を迎えに行き、そのまま山中の秘湯へ案内するのだ。
伴の者も連れていきたいと申されれば、都度ピストン輸送すればいい。

それよりも「うっかり鞍が外れて客人が落っこちた」なんてトラブルに見舞われないう、
入念な馬具のチェックの方が問題だ。

その点、カロロンはぬかりなく行っていた。

国王夫妻の世話役を、他ほかならぬリクドーから仰おほせつかった老紳士だが、彼なら心配りといい、
礼儀作法といい、王族を相手するになんの不足なき男であった。

「カ〜〜ツ、やっぱ昼から飲む酒は最高だなあ！」

「いい天気」

などと遊んで手伝おうともしない、ギリオンとネイたちには任せられなかった。

「なあああ、カロロンの旦那よお」

そのギリオンが、手伝いはしないのに相談口調で声をかけてくる。

「はい？　なんででしょうか？」

カロンは馬具の装着とチェックを続けながらも、律義に相手する。

「リクドー様は何を考えてんのかねえ？」

「と、言いますと？」

「いくらオードランは誤魔化せるって言ったって、ヴェステルの巫女と実際に契らなくていいわけがないと思わねえ？」

「本末転倒感が強い。あと、リクドー様の牙は本当に折れてしまったのかと思うと、情けない」
ネイまで一緒になって、主への不平を垂れる。

「なあ、どう思うよ？　旦那はリクドー様と一番、つき合いが長いだろ？」
ギリオンに訊ねられて、カロンは振り返った。

馬具のチェックは終わっていた。

「さあ？　あの方の黒い黒い腹の裡を読むことなど、誰にもできませんよ」
同僚たちに向け、小粋にウインクをしてみせる。

はぐらかしたわけではない。

本気で最初から、リクドーの考えなど読む努力をしていない。

「オレら眷属がそんなことでもいいのかよ？」

人の好いギリオンは、ひどくやきもきとしていた。

カロンは泰然と、出発のために鞍へ跨る。またが

馬上から答える。

「リクドー様は最古の神々の一柱。正真の剣の神。好きにさせておけばよいのですよ。巫女と契らなかるうが。雨神オードランごと如きに敗れ、軍門に下ろうが。百年もの間、一度も戦おうとしなかるうが。かの軍神との因縁すら、忘れてしまつたかのように振る舞われようが。平々凡々、太平楽に暮らそうが。リクドー様には深いお考えがあるのでしようし——」

カロンはそこで一度言葉を切り、ペガサスを羽ばたかせながら、出発の挨拶代わりに告げた。「——どうせ、最後に勝つてゐるのは、リクドー様なので、すから」

